

Patagonian Oxalis



Cover photo: *Oxalis laciniata* 'Kila 21'

---Plant Portraits---

パタゴニアン オキザリス PATAGONIAN OXALIS

カタバミ科カタバミ属 **Palmatifoliae**節(Section Palmatifoliae)のオキザリス

極地を除く世界の大陸に広く分布し、自生環境は海岸から高山まで及んで、その種数は800種にも及ぶオキザリス(カタバミ)属。形態や性質は、一年性や多年性、30cmを越す草本、灌木状の種まであり、南アフリカ、熱帯メキシコ、ブラジルでは特に多種多様で、とりわけ南米はオキザリス属の分布の中心地とされ、実に約250種も記載されて、分布の中心地とされている。しかし、小型で耐寒性があり、なおかつアルパインガーデナーにとって草姿と花容が魅力的な種類となると極めて限られてくる。

その中でも特に魅力的な種類として注目されるのが、チリとアルゼンチンの南緯40度から南米の最南端まで広がる広大なパタゴニア地方に分布するPalmatifoliae節のオキザリスだ。風の国といわれるパタゴニアには固いドーム状やクッション状に生育する風衝植物が多く、多肉植物を想わせる変わった姿のロゼット・ビオラなど、意表を突く形態の植物が多い。

植物の姿は、環境の賜物で、このPalmatifoliae節のオキザリスの姿はパタゴニアの風土そのものが生み出したものと言えるだろう。この節の他にも、比較的栽培が普及してる*Oxalis magellanica*とか、限られたトップクラスの栽培家が手掛けている*Oxalis erythrorhiza*などの他の節に分類される種類もあるが、ここでは触れない。

§ Palmatifoliae節のオキザリス

Palmatifoliae節のオキザリスは4種。分類によっては5種で、園芸的に最も身近なOxalis adenophylla、そしてOxalis enneaphylla、難物珍品のO. laciniata、O. loricata、5番目にO. morroneiが記載されていたが、これはlaciniata種の有毛の変種(O. laciniata var. pubescens)として分類されるようになった。

どの種も根茎性の草本で、冬に休眠し、春に再び掌状の葉を展開し、春の終わりから夏の初めに花を咲かせる。種によって自生環境は少し異なるが、年間降水量は300~450 mm、冷涼で比較的乾燥した気候で、夏の気温が20°Cを越すことは少ないという。



昭和50年代初めに手探りで栽培したオキザリス・アデノフィラ。

土壌はpH4.5前後の弱酸性で、1987年にアンデス南部の自生地採種の種子を入手した時に、一部の種子が現地の砂を使ってモイストパックされていて、知人に調べてもらったところ、やはり弱酸性で、砂はアンデサイト(アンデスの岩)=安山岩だった。日本で山草栽培に使われる砂質の用土は、大半が酸性なので、栽培用土については問題がないが、自生地のような気候条件に近づけることは難しい。難物の高山植物栽培の基本である雨除けと夏場の遮光、風通しがどうしても欠かせない。

この4種の中で、最も広く栽培されているのがオキザリス・アデノフィラだ。次いで、更に古くから栽培に着手されたオキザリス・エンネアフィラも、欧州の涼しい地域では園芸化が進んでいる。

§ オキザリス・アデノフィラ

オキザリス・アデノフィラ *Oxalis adenophylla* Gillies ex Hook

球根のように見える塊茎から成長する草本、多年生の弱酸性植物。高さ8~13cm。葉は灰緑色で小葉は通常約12個、まれに最大22個まで。花は長さ2.5cm、幅が2.5cm、花はライラックピンクで、晩春から夏にかけて開花。チリとアルゼンチンの高山帯1000~2600mの比較的乾いた岩礫の多い場所に自生する。耐寒性は非常に強く、北欧やカナダ東北部の寒冷地でも戸外で越冬できるとされているが、冬でも多湿は好まない。

塊茎は棕櫚皮のような外皮に包まれている。これは古い葉柄の残りで、そのままでは、そこに水分が溜まりやすい。北海道の積雪地でも、積雪下では凍結せずに多湿になる期間が長く続くので、この外皮を除去し、用土は、コマクサ栽培に準じた排水性の良い火山礫などを主体に植栽する。用土が僅かに湿り気を含んだ状態で、雑菌の繁殖も抑えられる低温で冬越しさせるのが理想的と思われる。

花色の変異は少ないようだが、分布域が広く、生息数も多いことから、欧州の一部の栽培家は



流通する個体の殆どは、これと同じ花のクローン。

自生地を訪れて、いろいろな個体の存在をレポートしている。野生品からの選抜品種として白花のO. a. 'Alba'、濃色の花のO. a. 'Rosea'が知られるが、欧州でも入手不可能な幻の品種のようだ。

スコットランドのSRGC(スコティッシュ・ロックガーデン・クラブ)会誌の記事によると、「Oxalis adenophyllaは、おそらく1902年に最初にイギリスに導入され、1914年の展示会で賞を受賞した。1920年代までは栽培が比較的まれな植物だった。O. adenophyllaは、アンデス山脈南部では広範囲に分布していて、チリのSan Fernando付近からLago General Carreraまで広がっているが、アルゼンチンのアンデスでは、それほど北部では見られない。植物は、石または砂が多いかなり急な開いた斜面で成長していたが、最も暑い北向きの局面を避けていた。」と解説されている。

この植物は自家不亲和性で、複数の個体があれば結実させて採種することは難しい。しかし、塊茎を分けて増殖させるのは容易で、欧州の生産者たちが積極的に栄養繁殖に努めた結果、100年ほどで園芸植物として広く普及した。

2005年、ラトビアのJanis Ruksansが、実生繁殖の個体から選抜した新品種O.a 'Purple Heart'「パープルハート」(葉の中心部に特徴的な赤い色を持つ)を出したが、これは稀な例で、世界に普及しているアデノフィラ種の大半は同一のクローンなのかもしれない。

日本では昭和初期に導入され、大阪山草俱樂部によって「クルマバカタバミ」と名付けられた記録があるが、これは記録だけに終わっただけらしい。



「洋種山草事典」(森和男:1983年)には

「分布 南米チリー」「環境 不明」「栽培 球根で入手することが多いが、春なかなかうまく出芽させることが出来ない。春に植えられたものを買入れるのが安心。」と記載されている。

森和男氏が記載したころには、オランダなどで量産されたものが、乾燥球根の扱いで輸入されて塊茎が安く販売されるようになった。以前、アルムでも輸入した塊茎から増殖して、ポット仕立ての株を販売していたが、しっかりと夏越しできる株に育てるには、それなりに手間がかかった。

安く販売されている「乾燥球根」には、未だに適切な説明がついていないし、栽培容易と匂わせている例もあるが、この種は、日本であればコマクサが自生するような環境で生きる高山植物だ。塊茎が乾きすぎてミイラ化してしまっている場合には、細根が伸びる根の生長点も傷んでいるので、出芽も順調な生育も望めない。

栽培は、涼しい時期には日に当てて、夏は風通しのある場所で直射日光を避け、多湿にも注意する。順調に育つと細根は多数出て深く伸びる。鉢の大きさは、根詰まりによる排水不良を避け



塊茎は棕櫚皮のような外皮(古い葉柄の基部)に包まれている。

るために、適切な深さが必要。

§ オキザリス・エンネアフィラ

オキザリス・エンネアフィラ *Oxalis enneaphylla* Cav.

オキザリス・エンネアフィラ *Oxalis enneaphylla*は、南パタゴニア、ティエラ・デル・フエゴ、フォークランド諸島に自生。 *enneaphylla*という種小名はギリシャ語の *ennea* (9)、*phyllon*(葉)に由来し、小葉は9個以上。草丈は約10cmだが、自生地ではそれ以下で地に伏して広がる。

自生環境は、海岸から標高約1300 mまでの砂や岩の多い土壌、涼しくて乾燥した草原で成長し、20°Cを超える夏の気温は珍しく、降水量はおそらく300~450 mm、フォークランド諸島の一部では650 mmに達する。

やや古い文献 "Flora Patagonica"では、二つの亜種 *ssp. ibari*と *ssp. enneaphylla*に分けられているが、デイビッド・ムーア教授(「ティエラ・デル・フエゴのフローラ」と「フォークランド諸島のフローラ」の著者)は、サイズ、成長初期、葉の形、花の色が明らかに環境によって変わっているという理由で、種を細分化していない。



O. enneaphylla 'Rosea'はフォークランド産では花色の濃い個体

春から夏にかけて開花し、長さ約2.5cm、花は白から淡いバラ色、淡いラベンダー色に濃い紫色のベイン模様が入る個体などがある。フォークランド諸島では白が優勢で、本土パタゴニアではピンクが多い。葉と花のサイズ、花色に変異がある種で、鱗翅目昆虫(蛾および蝶)によって受粉されるが、自家不稔性。栽培では採種が難しく、実生繁殖された個体は極めて希少で、野生品から選抜された幾つかの品種が栽培されている

*Oxalis enneaphylla*については古い記述や標本が残っていて、初期の植物標本資料には、チャールズ・ダーウィン Charles Darwin (1834) およびジョセフ・ダルトン・フッカー Joseph Dalton Hooker (1842) の標本がイギリスに保存されている。

チャールズ・ダーウィンと共にビーグル号に乗船した助手のシムズ・コビントンは、フォークランド諸島の日誌の中で、*Oxalis enneaphylla*を「ワイルドタイム」と呼んで書き残している。

「ここは非常に寒いと感じた。島は一般的に山が多い。見るべき単一の木はないが、非常に美味しい赤い果実のある低い茂みがあり~非常に甘い果実を産む茶樹、そして、それよりも非常に良く、より豊富で、我々が茶として使用したワイルドタイムがある」

その葉がビタミンCが豊富なことは、この海域を航海する船員たちには'scurvygrass'の名で知られていて、壊血病を避けるために葉を使っていたという。

栽培に導入されるのは19世紀の後半からで、当初栽培されたのはフォークランド諸島産。高名なプラントハンターのレジナルド・ファラー(Reginald Farrer)は、1907年に、*O. enneaphylla*について「しわがれた豊かな灰緑色の葉の中にたたずむ真珠のような白い渦巻き状の花の花輪」と書いて

た。当時の彼は花がピンク色の個体を知らず、1909年に「それを集めるためにフォークランド諸島に飛び出した」とクラレンス・エリオット(高名なBroadwellナーセリーの初代)は記している。

その結果、多くの白花の中から、淡いローズピンクの花の咲く個体を彼は見つけ出し、*O. enneaphylla* 'Rosea'と命名されることになる個体をイギリスに導入した。これは1912年5月の展示会でクラレンス・エリオットによって出品され賞を受賞して今に至っている。



O.e. 'Patagonia'「パタゴニア」は、花色が濃くて性質も強い。

その後に命名された栽培品種は、O.e. 'Alba'「アルバ」が白色の花、'Ruth Tweedie'「ルーストウイーディー」がシェルピンク、'Rosea'「ロセア」(淡いピンク)、'Rubra'「ルブラ」(濃いピンク)、'Minutifolia'「ミヌティフォリア」(小さい葉でよりコンパクト)。残念ながら、これらのどれも満足のいく品種名と言えないようで、少し混乱が生じている。

例えば、'Alba'および'Rosea'という栽培品種名は、白およびピンクの花を咲かせる植物の範囲を表すために使用されてきた。エンナフィラは自家不和合性であるため、種子を得るためには起源の異なる少なくとも2つの個体が必要とされる。実

生繁殖によって新しい個体が多数誕生する可能性は、今は低いものの、'Rosea'や'Rubra'の名にもっとふさわしい個体は、パタゴニアには存在していると予想されている。

'Ruth Tweedie'は現存していないようだが、これは現在では別種だったと推定されている

O.e. 'Patagonia'「パタゴニア」は、欧米で最も普及している品種で、名のごとくパタゴニア本土産。フォークランド産の'Rosea'よりも花色が濃く、性質は比較的強健。古くは種として分類され*Oxalis patagonica* Spegazzini (1897). または変種*Oxalis enneaphylla* var. *patagonica* (Speg.) (1916). として扱われていたが、O.e. 'Patagonica'「パタゴニカ」と呼ばれることも多く、まだ名前が混乱している。



珍しい円形の花容で純白の O.e. 'Sheffield Swan'「シェフィールド スワン」

O.e. 'Sheffield Swan'「シェフィールド スワン」はフォークランド諸島産。HMS Sheffield号の船長Peter Erskineによって採集された純白花個体。珍しい広花弁の個体で、花弁が重なり、ほぼ円形の花形に咲く。1985年にKath Drydenによって名付けられ、1997年に受賞した素晴らしい白花品種だが、ややデリケートな性質。

1997年に公表されたO.e. 'Lady Elizabeth'「レディエリザベス」もフォークランド産。これは大きく淡い赤色がかかったピンク色の花で、その発見地ポートスタンリーのホエールボーン湾に残る快速帆船、Lady Elizabeth号にちなん

で名付けられた。

イギリスでは、東部スコットランドと涼しくて比較的乾燥した北東イングランドがエンネアフィラの栽培適地で、イングランド南部の栽培では乾燥と暑さ対策が必要とされている。

日本での栽培は、当然、アデノフィラ種よりも高山植物としてのケアが必要。この節の4種はどれも夏緑性で、夏に休眠しない。夏に葉を失うと作落ちしてしまう。植え替えについて質問を受けることがあるが、秋まで葉が残れば栽培に成功していると言える。冬期に用土凍結の心配がなければ、植え替えは休眠後すぐにでも良いが、春までには植え替えして、増えている場合は根茎を分けるが、あまり小分けすると、何故か出芽しないことがある。

§ オキザリス・ラキニアタ (ラシニアタ)

オキザリス・ラキニアタ *Oxalis laciniata* Cav.

*O. laciniata*は、*enneaphylla*よりも繊細な太い糸状の鱗状根茎から成長し、高さ3~5cm、小葉は約10枚で、縦に折りたたまれた狭い葉で、強く波打つ。花は長さ約2.5cm、香りがあり、非常に多様な花色の個体が知られている。濃い青紫色、深紅色、ピンクまたは白、中心部は暗色または緑色で、縞模様がある。

栽培では、葉のうねりの程度やその他の特徴は年によって異なり、花色も、開花までの気温や日照量などで微妙に変化がある。アルパインハウスに向く植物とされているが、青紫系の個体は過保護は禁物。夜間の冷え込みが無いと、花色が冴えなくなる。

分布は*O. enneaphylla*の分布と似ているが、フォークランド諸島には無く、フエゴ島にも分布していない。アルゼンチン(パタゴニア)とチリのごく一部に分布。*O. laciniata*は涼しい気候で生育し、1100m以上では見られない。*O. enneaphylla*より石が多い砂質の土壌で、より乾燥した条件を好む。しかし、この2種の自生地は密接に隣接していることがあり、混在した集団も見られるとされている。



20世紀初頭には、*O. laciniata*と*O. enneaphylla*との間に分類上の混乱があり、本当のラキニアタ種は、ごく最近までイギリスに導入されていなかったという。分類が不確かながら1956年にショウに出品展示されてから、トップクラスのナーセリーや栽培家に注目されるようになったのだという。

アルムでは、1984年の冬にスコットランドのナーセリーから苗を輸入して実物を見ることができた。今のように容易に情報や写真を見られる時代ではなかったから、簡単な説明しか書かれていない植物リストから「パタゴニア産で小型種」という説明だけで、オキザリス・エンネアフィラと共に選んだ種類だった。

参考にしたのは「パタゴニア探検記」(1968/高木 正孝/岩波新書)だけで、それだけの情報で、風の国、風の大地からの植物に取り組んだのだった。

春、順調に芽出しして、葉が伸び始めたものの、葉は小さく縮こまったような姿のまま、一向に展開しない。まるで叩かれたような姿の植物だった。種小名*laciniata*は葉が「細かく分裂し



た」の意味。太古の昔から冷たく乾いた風に叩かれ続けて、このような姿を獲得したのだろう。

試行錯誤で栽培したが、ラキニアタは難物の部類だった。枯らしては再挑戦し、苗の輸入はその後10年間で5回。夏から秋の長雨をしっかりと避けることで栽培できるようになったが、ある冬、カタバミの天敵・ノネズミに食害されて原種のラキニアタは一度完全に絶えてしまった。



この種も自家不和和性で、長花柱、短花柱、その中間の花柱の個体がなければ、人工授粉もできない。種子は熟すとスミレのように勢いよく飛び散るので、採種の手間も大変なものだ。海外山草会の種子交換リストにも載ることはなく、したがって、その種子は苗よりも希少なものだ。

Oxalis laciniata 'Kila 008' 芽出し

イギリスでは、北部の寒い気候、特に乾燥地が栽培に合っていて、いくつかのクローンは、ロックガーデンの排水の良いポケットの中で良い成長をするという。しかし休眠時には低温管理が容易な鉢栽培が最適とされ、あるナーセリーの説明では、休眠中もある程度の用土中の水分が必要と記されている。



Oxalis laciniata 'Kila 077' 有毛の葉の個体

著しく個体差がある種類なので、現在イギリスで繁殖されているものは比較的丈夫な生き残りのクローンなのかも知れない。ただし、通販などで入手できる個体では、魅力的な花を期待するのは無理で、最近のSRGCの会誌にも「野生で収集された私の株の1つは非常に弱く、ただ生きているだけだった」

と、ある会員が書いているが、この種ならではの素晴らしい青紫の品を咲かせる個体ほど、よりデリケートな性質なのかも知れない。

日本での栽培は、夏の暑さと湿度を考えるとかなり難しい。仙台在住のベテラン栽培家は数年に及ぶ栽培に成功しているが、それより南西部では涼しい高冷地でなければ、ほぼ不可能と思われる



Oxalis laciniata 'Astrid' (左)

原種のラキニアタは高根の花だが、Palmatifoliae節の他種との交配で生まれた交配品種の中には、ラキニアタの特徴を受け継ぎながら雑種強勢になっている幾つかの個体があり、これはエンネアフィラ種が栽培できる環境であれば、努力次第で栽培可能。

Oxalis laciniata 'Tilde' (右)



Oxalis laciniata 'Kila 008'



Oxalis laciniata 'Kila 030'



Oxalis laciniata 'Kila 024'



Oxalis laciniata 'Kila 025'



Oxalis laciniata 'Kila 117'



Oxalis laciniata 'Kila 117b'



Oxalis laciniata 'Purple'



Oxalis laciniata 'Kila 120 A'



Oxalis laciniata 'ko1'



Oxalis laciniata 'ko3'

§ オキザリス・ロリカタ

オキザリス・ロリカタ *Oxalis loricata* Dusén



オキザリス・ロリカタの芽出し

*Oxalis loricata*は、その存在を近年ようやく知られるようになった種類で、イギリスの山草園芸書でも少し古い出版では記載がない。栽培されている個体はほとんどなく、この種の栽培は、最も難しいとされている。

*O. loricata*の葉は無毛で、小葉は5~12個で丸みを帯び、あずき色または紫色で縁取られる。花は白からピンク色で、同じ場所ではほとんど個体差はないが、散在して異なる自生地では、しばしば

顕著に異なる。根茎は丈夫で（直径約1cm弱）、赤い肉厚の鱗片で覆われている。



Oxalis loricata オキザリス・ロリカタ

'Flora Patagonica'には、アルゼンチンアンデス山脈とそれに隣接するチリで発見されたと記載されているようで、その自生地は、800~1600mの森林限界上の比較的湿気があるが水はけの良い場所とされている。

今では分布域も詳しく調査され、場所によってはエンネアフィラ種と分布が重なることも知られているが、それまでは、この種が知られていないこともあって、混乱の時代があった。1963年にRuth Tweedie夫人が種名不詳で出品展示したオキザリス「R. Tweedie 170」が賞を授与され、その後、

これはO. enneaphyllaであると考えられて、栽培品種名Oxalis enneaphylla「Ruth Tweedie」が与えられた。この品種のクローンは普及することはなかったようだが、受賞品種なので、イギリスの園芸書には名が載っている。

しかし、パタゴニアン・オキザリスのトップクラスの栽培家Peter Erskineは、近年のSRGCの会誌に「'Tweedie 170'、別名Oxalis enneaphylla 'Ruth Tweedie'、本名Oxalis loricataは、もう栽培されていません」と書いている。つまり、本当はオキザリス・ロリカタだった個体が、その後はエンネアフィラとして栽培されたが、すでに絶えてしまったという。

近年は、イギリスを含む欧州圏の栽培家の間で、パタゴニアの植物は以前にもまして注目を集めていて、SRGCなどの会誌では自生地の写真が掲載されるようになった。少ないながらもロリカタ種の写真も載るようになって、興味をそそられたが、難物ラキニアタよりもさらに縮こまった姿で、さらに難物と思えた。

何十年か先には、このロリカタも栽培可能な個体が見つけれられるだろうと予想していたが、意外にもイギリスよりも早く、この種の栽培が北欧では始められていた。



1919年から48年までヨーテボリ植物園の責任者を務めた植物学者カール・スコツバークは、1907~09年のスウェーデンのマゼラン探検隊に参加し、広くパタゴニアを旅して多くの植物を記載し、学名にも彼の名が残っている。北欧圏の栽培家にとって、パタゴニアの植物は、案外親しみやすいのかもしれない。

栽培条件については不明だが、日本では、ほぼ栽培不可能な種と考えてよいのだろう。

§ パタゴニアン・オキザリスの交配品種

この節のオキザリスは自家不亲和性で、花柱の異なる別個体が無ければ種子を結実させるこ

とができない。そのため現状では栄養繁殖によって増殖されているのだが、イギリスを含む欧州圏ではアデノフィラ種、エンネアフィラ種、それにラキニアタ種を交雑させるハイブリッド品種の作出が進んでいる。

先駆的で高名だったが、今では名を残すのみになったJack DrakeナーセリーではO. enneaphylla x adenophylla(BearsdenのWillie Buchananの庭が出身)を1980年代から販売していたが、このクローンには品種名が無かった。



O. 'Dark Eye' 「ダークアイ」

恐らく、それに近いのがOxalis 'Dark Eye' 「ダークアイ」(syn. Oxalis adenophylla 'Dark Eye')で、O. アデノフィラとO. エンネアフィラとの交配種。花は大輪のピンクで、中心の暗色の目が特徴の魅力ある花。性質は強く育て易い。

近年では、花に変異幅があって青紫色の花の個体も存在するものの、栽培が難しいラキニアタ種に、それよりは栽培が可能なエンネアフィラ種を交配することが行われている。

その始まりとなったOxalis 'Ione Hecker' 「イオン ヘッカー」はE.B. Anderson作出の交配種(O. ラキニアタ×エンネアフィラ)で1976年に賞を受賞した。丈5cm程度。青味を含むピンクの大輪花で、葉はラキニアタに似る縮れた灰緑色。成長は遅いが、明らかに雑種強勢で、エンネアフィラと同じ扱いで栽培できる。



O. 'Ione Hecker' 「イオン ヘッカー」

いう。その一つGerd Stoppの作出したOxalis 'Ute' 「ウテ」は、販売するナーセリーが始めた。花色は白に近い薄ピンクで、花弁が広く、ほぼ円形の類い稀な花形。品種名は彼の妻の名だという。

その他にも以下のような品種などが生まれているが、いずれも入手は難しい。

Oxalis 'Gwen McBride' (O. enneaphylla x laciniata)ハロルド・マクブライドが交配した品種。花は径5cm超の巨大輪。

'Beatrice Anderson' 「ベアトリス アンダーソン」は同じ種子兄弟から選抜されたそうだが、性質はラキニアタに近く、強健とは言い難い。

Oxalis 'Hemswell Knight'も同じ種子兄弟から選抜されて命名されたという。花色は赤味出るパープルで、これも入手できたが性質は、まだ不明。

オランダやドイツ、北欧圏の国で生まれたいくつか交配品種は、プロではない園芸家の手によるもののため、なかなか普及しないが、それらはすべてラキニアタの血を持っているように見えると



O. 'Beatrice Anderson' 「ベアトリス アンダーソン」

Oxalis 'Purple Haze' (Oxalis laciniata 'Seven Bells' x adenophylla)

Oxalis 'Matthew Forrest' これは'Dark Eye'と同じくO. enneaphylla x adenophyllaとされるが、ラキニアタが片親という説もある。

Oxalis 'Ivory' ラキニアタのハイブリッドだが、塊茎はアデノフィラに似ている。

Oxalis 'Ridgeway Sapphire' 詳細不明だが、明らかにラキニアタ×エンネアフィラ。

Oxalis 'Super Star' ピンクでパープルのベイン模様。

Oxalis 'Ultra Violet' ラキニアタの血が強く出て、青紫の素晴らしい花色だが、性質は強くない。



O. 'Hemswell_Knight'



Oxalis 'Matthew Forrest'



Oxalis 'Ivory'



Oxalis 'Hemswell Knight'

ラトビアのJanis Ruksansが出所の'Sweet Sue'は、Oxalis laciniata 'Sweet Sue'と表記されることが多いが、以前はOxalis patagonica 'Sweet Sue'と表記されていた。青紫の素敵な花を咲かせるが、ラキニアタの血が良く出たO.e. 'Patagonia'とのハイブリットと推察される。

§ アルムで誕生したオキザリス・ラキニアタ・ハイブリッド

アルムでは、1985年頃から何度もラキニアタを輸入して栽培を試みたが、作りこなすことができず、最後はノネズミの食害で絶えたりした。しかし同年代に輸入した「イオンヘッカー」はエンネアフィラと同程度か、むしろ強いほどの雑種強勢で、長年栽培を続けられている。



しかし、交配苗も原種のラキニアタと同様で、性質には非常に個体差が出る。手間がかかる交配、採種、播種作業を経て、何とか発芽に漕ぎつけても、全部が育つことは無く、育ってもただ生きているだけの個体も出る。普通は発芽から4から5年で開花してくれるが、一向に咲く気配のない株まで生まれてくる。

そんなことは他の植物の交配育種で経験していたから、初めは大それた期待は無く、幸運にも完熟種子が採種できたから蒔いてみた。全く発芽してくれない年もあるのだが、最初の試みで幸いに

も発芽に成功できたことから育種が始まった。

写真のオキザリス・ラキニアタ 交配種「Ezo 171」(Oxalis laciniata hybrid 'Ezo171')は、アルムで誕生し最初に選抜したオキザリス・ラキニアタとオキザリス・エンネアフィラとの交配種。葉は原種のラキニアタより少し大きい「叩かれたような姿」の葉の縮れ(うねり)はそっくりだ。複数の兄弟株の中で、この個体は最も花色が淡いが、ベイン模様(縞筋)が入り、ドイツで作出された珍しい円形の花の品種「ウテ」Oxalis 'Ute' に似ている。生育は旺盛で、次々に蕾を出し、長く咲き続ける。

「Ezo 173」は兄弟株で、やはり雑種強勢。葉は両親の中間で繊細。花は「パタゴニア」に似るが、ベイン模様と目は、より鮮明で、昼夜の温度差が大きい寒い時期には、花色に青味を帯びる。

「Ezo 181」は、 円弁花 葉はうねりが強い

「Ezo 183」は、クッキリとした濃い色の目。葉はシルバー

「Ezo 186」は、円弁花 葉はラキニアタの血が強く出た波状のうねり葉でシルバー。

以上は選抜した一部の個体で、選抜から漏れたもの、成株まで育つことなく枯れたものも多数ある。明らかにラキニアタの血が出た選抜個体でも、開花株まで育ったものは、今のところラキニアタの弱い性質は受け継いでいないようで、まだ成株まで育っていない苗たちが、どんな個体に育つのか、楽しみは尽きない。

写真は右上から「Ezo 173」「Ezo 181」

「Ezo 183」「Ezo 186」

下は「Ezo 186」早春のころの葉。

